

# さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571  
E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・おつとめの扇は…
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・おやさま逸話篇から
- 4面・教会の動き・編集後記

## 教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
- 夕づとめ…毎夕・7時00分
- 春季大祭…1月21日午後1時30分
- 秋季大祭…10月21日午後1時30分
- 月次祭…毎月21日 午後1時30分
- 春・秋季霊祭…3月22日、9月22日 午後1時30分

※教会の場所は、左の地図の🍀マーク。市立公民館の裏・西側です。



「狭山よふぼく躍進の集い」開催  
右のチラシの画像の通り、来る10月28日(日)に、開催されます。要項は以下の通りです。

日時 10月28日(日)

午前9時受付開始

午前10時からおつとめ開始

内容 おつとめまなび総会

記念講話・お楽しみ行事もあります。

服装 ハッピ、靴下着用。

■今年も行ったよ、KOG(7月28、29日)マイクロバスで帰参しました。



## 編集後記

▼八月は猛暑続きで、大阪でも最高気温が38度を超える日がありました。編集子は、暑さを大の苦手にしております。相棒のパソコンも暑さに弱く、日中は電源を入れておいて熱暴走することがままありました。

▼そんなこともあって、本紙の発行も遅れてしまいました。何とか8月中にと思っていました。結局、9月になってしまいました。

▼巻頭の記事は、編集子が上級・狭山青年会機関紙「飛躍」に書いた元原稿に加筆したものです。

▼わがホームページのブログの方も、いろいろな話題を展開していますので、ご覧ください。 <http://sachihiro.com> 「#やまさんのブログ」からお入りください。

## さちひろ 第19号

編集兼発行人・山口 渡  
平成19年9月5日  
大阪狭山市今熊1丁目1133番地  
TEL・072136512571

## おつとめの扇はいつから日の丸になった？

おつとめで使う「日の丸の扇」のルーツを探る編集長のエッセイです。いっしょに考えて下さい

おつとめの三下り目、四下り目は「扇の手」と言われて、扇が使われます。皆さんよくご存じの通りです。白地に赤丸のこのデザイン、ご覧になってどういった思いを抱かれますか。日本の国旗のイメージ？ 戦前の軍国主義？ 日の丸に関する最も古い資料としては、「続日本紀」(797年)に「日像」の旗を掲げたという記述があり、これが日の丸使用の最初と考えられています。日の丸は太陽を象徴しています。太陽の色は赤です。

上古以来、朝廷の軍の旗は赤色だったようで、源平が戦った時代、平家は朝廷・天皇の側につき正当な政権であることを示す上から赤旗を使用したと言われています。逆に源氏はそれに対抗して白旗を用いたそうです。これ以来、紅白はそれぞれの陣営の旗印・旗色として定着したと言われています。そして、壇ノ浦の戦いでは、義経の源氏が平家に対して掲げたのが白地に赤の日の丸、それに対して平家の旗印は、赤地に白の日の丸だったとか。あの那須与一が射落とした扇は、赤地に白の日の丸でした。以来、天下とりを目指す武將は、白地に赤の日の丸をもって、源氏の流れを汲むものであることを強く意識して、掲げました。こうして日本の国印、日本全体の国の印として、日の丸のイメージが人々の間に形成されたいのです。1853年



に米国からペリーがやって来たときも、日の丸は日本側の総船印として掲げられたといえます。このように白地に赤の日の丸は、昔から使っていた紋章だと言えると思います。明治時代には、おそろく日の丸の扇は市販されていて、どこでも手に入れることができるものだったと想像します。

ところで、おつとめの道具としての「扇」について、教祖時代には「月日の扇」が使われていたという話があります。みちのとも誌にも、その写真が掲載されたことがありますが、ご覧になった方もあるでしょう。

月の方は、左が欠ける三日月ではなく、右が欠けている二十六日月です。この写真は河原町大教会に保存されていたもので、実際におつとめに使われたものかどうかはわかりません。おそらく特別に注文して作られたのでしょう。意匠については教祖が直に指示されたものと思われるのですが、一般の人がてをどりまなびをするのに、そのような特注の扇を揃えるのは難しかったと考えられます。本部にも保存されているそうです。

明治15年と明治19年に毎日づとめがつとめられます。このときにどのような

扇が使われたのでしよう。今となってはわかりません。明治18年に、神道本局の六等教会となつて後、神道本局の意向が、扇の意匠についても当然働いたものと考えられます。「月日」の印（日月紋）は、天皇家の紋章です。この意匠をおつとめの扇に使うことに對して、本部としての配慮があつたのかも知れません。



明治14年に教祖が召下ろしの赤衣で作られた菊の紋章を人々に渡す。この紋章

（菊花紋）も、実は、天皇家専用の紋でしたので、後にこれに替えて梅鉢紋が使われたのではないかと、考える人があります。しかし、梅鉢の方は、おさしづでその使用の許諾が伺われており、問題のあるところでは使うなという指しもだされてはいますが、扇については、おさしづでの言及が何もありません。日の丸の扇使用を黙認されたとも考えられます。最後に掲げた写真は、明治41年、天理教が一派独立したときのおつとめの様子を描いたものです。日の丸の扇を使って踊るつとめ人衆が描かれています。

そんなわけで、いつ頃から日の丸の扇を使ったのかは、明言がむずかしいようです。一説には、明治29年の秘密訓令発布あたりまでは「月日の扇」が使われていたとも言われます。しかし本部直轄の古い教会でも当時使っていたこの扇が話題になりません。「月日の扇」は、特別注文して作らないと手に入りません。「日の丸の扇」は市販されていたので、教祖御在世中でも、場面によって日の丸の扇が使われていたのではないのでしょうか。

## 幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

### 幸福の定着

（善本社刊）から

アポロの宇宙飛行士たちは、飛行中、カルシウム不足に悩んだ。どんなに摂取しても、おしっこなどで排泄された。原因は運動不足である。飛行士は長時間椅子に座り、立つことが少ない。ところが、カルシウムは、人間が立つか、動くかして、外部から骨に力を加えてやらないと、骨に定着しない。そういえば、この説と似たことが言える。いろいろ立派な教えを聞きながら、少しも幸福にならない人がいる。その原因は、聞き信心、耳学問にある。そこをよくわきまえて、教えを素直に実践してこそ、魂に幸福が定着する。

### 『稿本天理教祖伝逸話篇』

42

明治八年四月上旬、福井県山東村菅浜の榎本栄治郎は、娘きよの気の違いを救ってもらいたいと西国巡礼をして、第八番長谷観音に詣つたところ、茶店の老婆から、「庄屋敷村には生神様がござる。」と聞き、早速、三輪を経て庄屋敷に到り、お屋敷を訪れ、取次に頼んで、教祖にお目通りした。すると、教祖は、

「心配は要らん要らん。家に災難が出ているから、早ようおかえり。かえつたら、村の中、戸毎に入り込んで、四十二人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合せて神さんをしっかりと拝んで廻わるのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。」

と、お言葉を下された。栄治郎は、心もはればれとして、庄屋敷を立ち、木津、京都、塩津を経て、菅浜に着いたのは、四月二十三日であった。娘は、ひどく狂うていた。しかし、

## 人を救けたら

両手を合わせて、なむてんりわうのみこと

と、繰り返し願うているうちに、不思議にも、娘はだんだんと静かになって来た。それで、教祖のお言葉通り、村中ににをいがけをして廻わり、病人の居る家は重ねて何度も廻わつて、四十二人の平癒を拝み続けた。

すると、不思議にも、娘はすっかり全快の御守護を頂いた。方々の家からもお礼に来た。全快した娘には、養子をもろうた。

栄治郎と娘夫婦の三人は、救けて頂いたお礼に、おちばへ帰らせて頂き、教祖にお目通りさせて頂いた。

教祖は、真つ赤な赤衣をお召しになり、白髪で茶せんに結うておられ、綺麗な上品なお姿であられた、という。

■「巡礼」とは、辞書に、「仏・菩薩・祖師などのゆかりの霊蹟や、仏寺などを巡つて参拝すること」とあります。わが国へは中国からその風が伝えられたといわれます。

「西国三十三ヶ所巡礼」とは、近畿・東海の二府五県にまたがる観音さまの霊場を巡拝する作法で、これはわが国における最古の巡礼道だそうです。

■自分の娘をたすけたいとの思いで西国巡礼に出た榎本栄二郎。ふとしたことからおちばを訪れることとなり、そこで、何とおやさまから、自分の娘ではなく、四十二人の人を、天理王命の神名を唱えてたすけるように諭されました。そして、我が身のことを忘れてこれを実際にやり通すことによつて、娘の気の身上がすっかり全快のご守護をいただかれた、という話です。

自分や身の内のためではなくて、他人の難儀、不自由、苦しみを放つておかず、わがごとく思つて人だすけを念じます。そうすることによつて、自らの心が浄化されて、濁りの心から澄んだ心に変わります。それによつて、神様が望まれる人間へと「成人」させていただけるのです。